

付属幼稚園での音楽表現指導の試み

末 吉 加代子

1. はじめに

幼児教育においてまず大切にしなければならないことは、「幼児を熟知する」ということであろう。しかしながら筆者は、ピアノを専攻したということだけで幼児についてほとんど理解しないまま、長年にわたり幼稚園教諭や保育士を目指す学生に「音楽表現」の指導を続けてきた。楽譜通りに正しくピアノを弾くことや、大きな声で正確に歌うという技術的な面はともかく、受講した学生が実際の保育現場で子どもたちに「音楽を表現することの喜びや感動を伝える」ことができているのかと心配してきた。そこで以前から、機会があれば幼稚園を参観したり、許されるなら直接子どもたちに歌唱やリズム合奏の指導をして、筆者が今日まで授業で指導してきた「音楽表現」が、実際に現場で生かすことができるのかどうかを検証してみたいと思ってきた。

幸いにも、本学付属幼稚園の平成14年度の指導方針の一つに「短期大学と連携して教育する」との項目が掲げられたことから、筆者の念願が叶い、実習の機会を得ることができた。平成14年9月と10月の2回の実習の他に、7月の「七夕まつり会」と平成15年2月の「子ども音楽会」の行事にも関わることができた。これらの体験報告と共に、今後の「音楽表現」の指導について考察してみたい。

2. 付属幼稚園への質問 (Q&A)

平成14年6月24日、幼稚園に山田敦子園長を訪ね指導方針や現場の状況を伺う。

Q：幼稚園の指導方針について

A：心身共に調和のとれた発達を目指し、創造性を培うための表現活動を大切にする。

Q：クラス編成 A：年中（3～4才児）67名 年長（5才児）46名

Q：楽器庫の備品 A：ピアノ、卓上シロホン、ピアノカ、大太鼓、小太鼓、他打楽器多数

Q：春・夏に歌われている童謡

A：年少――かえるのうた、かたつむり、のっこのこかめのこ、ブランコ毛虫、せんせいとおともだち、つばめになって、お星さま、アイスクリームのうた、あまだれポットン
年中――年少レパートリーに たなばた、とけいのうた、あめふりくまのこが加わる
年長――年中レパートリーに ロケットばびゅーん、ロケット、やまのワルツが加わる

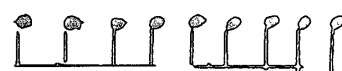
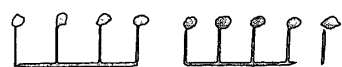
以上の童謡については、音楽表現の教材として扱っている馴染みの歌ばかりであり、長年歌われ続けてきたものばかりである。筆者としては「もっと目新しい童謡も採り上げられているのではないか」という期待もしていたが、幼稚園では「表現活動や創造性を培うためには季節感・生活体験が大切であり、

童謡は幼児が成長する過程で情緒を養ったり、イメージを膨らませる上で大きな役割を果たすもの」という観点から、選曲に考慮されているとのことであった。

しかし一方、今日マス・メディアによって子どもたちの周囲の音楽も多様化してきており、魅力的なサウンドや複雑なリズムに慣れている現代の子どもの音楽的な興味を、十分に満たすことができるのかという思いもある。山田園長は、常に子どもたちのことを念頭におきながらお話しされているが、おそらく同じ童謡を指導しても、筆者が想っている音楽的な表現と、園長の曲想とでは隔たりがあるのかもしれない。果たして筆者に子どもたちの指導ができるのかと不安になってくる。そのような心を見透かされたのか、「七夕まつり会で園児に紹介したいと思いますが、歌を歌っていただけませんか」と提案していただいた。筆者としては少しでも園児に慣れおきたいという気持ちが強く、喜んで参加させていただくことにした。しかし、童謡と言えども歌うことは専門外なので、本学幼児教育学科非常勤講師で声楽専門の平松陽子先生に歌っていただき、筆者はピアノ伴奏を担当することになった。

打ち合わせ後、教室を見学させていただいた。突然の訪問にもかかわらず、よく整頓された部屋で子どもたちは落ち着いて担任の先生の話を聞いており、先生方の指導力には感心する。ちょうど自由時間になったので、教室から出てきた年長児に「こんにちは」と声をかけてみた。子どもたちの「こんにちは」の大合唱と共に、たちまち取り囲まれ大変感激した。どの子も本当に可愛いと思える。早速実習のチャンスの到来とばかりに、リズム打ちを始めてみた。手拍子を打ちながら

(筆者) リズムで こんにちは はい真似して (園児) リズムで こんにちは



げんきかな

ハイ

げんきかな



ひこーき 飛んでる

ハイ

ひこーき 飛んでる



「よーし、もっと難しいことをするぞ」といろいろなリズム打ちをして遊んでみた。

勿論、反応できない子もいるが、すぐに応じられる子も多数いる。幼児は模倣によって学習するものであるが、さすがに物真似上手であり好奇心や意欲が旺盛である。そして4～5才児が、既にかんりの能力を持っていることに気付かされる。この素晴らしい能力を如何に伸ばしていくかが、指導者の大切な役割であろう。

3. 七夕まつり会

平成14年7月6日(土)リズム室に園児と保護者、次年度の入園希望者、短大の実習生が集い、大変賑やかな中で「七夕まつり会」が始まった。(図1プログラム参照)

体育館と言えるような広いリズム室の正面には七夕飾りや季節の野菜が祭られ、部屋の中央は運動場のように広く空けられ、それを囲むように三方に座席がしつらえてある。子どもたちは、広い室内を賑

やかに思いきり走り回っている。筆者にはどのような七夕まつり会になるのか予想もつかない。しかし、先生方のタンブリンやピアノの合図で子どもたちは一斉に行進を始め、色々なポーズをとったりしている間に次第に落ち着き、いつの間にか各自の席に着いていた。まるで魔術を見ているようである。園長より「何かを行う際、その前に思いきり運動させておくと長時間落ち着かせることができるのです。」との説明をいただいた。子どもたちは目を輝かせて先生の七夕まつりの話を聞いていたが、随所に子どもたちを指導する上での工夫が見られ、大変参考になる。

さて、園児の発表の中で歌については、平松先生は「子どもらしく素直な声でとても元気良く歌っている。ただ元気良く歌うあまり、大きな声というよりも半ば怒鳴るように歌っており、そこが気にかかる。怒鳴り続けて声帯に負担をかけ続けると、大人でも声帯ポリープができたり、子どもでは小児声帯結節や嗄声（いわゆるハスキーなしゃがれ声）になることは周知であろう。また、怒鳴ってしまうことにより、せっかくの歌も音程の無い騒音と化してしまう。かと言って決して子どもに、オペラ歌手のような発声で歌うように望んでいるのではない。『元気良く歌う＝怒鳴るように歌う』というのではなく、きちんとした音程で自信を持って伸び伸びと表現してもらいたい。また、『音程に関係なく怒鳴って歌う』ということがいわゆる『音痴』にも関係するのではないかと考えており、このことから『怒鳴らずに歌う』ことの重要性を改めて強く感じる」と指摘されていた。

器楽合奏では「かえるの合唱」で、ハーモニカとピアノによるメロディ奏をしっかりと演奏していたのに感心した。特にハーモニカは感覚を頼りに演奏するものであり、幼児に教えるのは非常に難しいと思われるが、本当によく仕上げられたと思う。ドからラまで6音も音が出せるのなら、ピアノで重音や和音を弾くことも可能であると、実習が楽しみになってきた。

さてプログラム最後を飾る我々の発表であるが、会場の状況も考えないで、大変気軽に引き受けてしまった感がある。園長からリクエストのあった「あめふりくまのこ」「大きな古時計」と、七夕まつりに因んで「星に願いを」を演奏した。「七夕まつり会」も終わりに近づき、子どもたちも落ち着きがなくなる頃である。「あめふりくまのこ」「大きな古時計」は未だしも、「星に願いを」は途中から原語で歌ったこともあり、きつと退屈したのではないと思われる。このような時には、子どもにも部分的に参加させたり、手遊び歌のような楽しい工夫を取り入れることが必要であろう。その場の雰囲気を感じて臨機応変に対処する能力こそが、「表現」を指導する上で重要であることに気付かされた。またこれは、相手が幼児に限らずどの世代に対しても言えることであり、指導する側には人を引き付けたり飽きさせない努力が欠かせない。筆者の講義においても心掛けねばならないことと改めて感じた。

4. 第1回実習 9月26日 10:30~11:40リズム室にて(年中児 きく組34名たんぼ組33名)

*これからの実習では平松先生に歌や呼びかけ等を担当していただく

テーマ とんぼのめがね¹⁾ (額賀誠志作詞 平井康三郎作曲)

ちょうどこの季節は赤トンボが山から里に降りてくる頃である。トンボは子どもにとり、身近で可愛く興味深い生き物である。短い詩の中に自然の美しい情景が色彩豊かに表現され、思わずトンボをじっくり観察してみたくなるのではないだろうか。僅か12小節の簡単なメロディではあるが、トンボの飛んでいる様子や、秋の爽やかさが伝わってくる。幼児の感性を育てくれる名曲と思う。筆者も子どもた

ちと一緒にトンボになって野山を飛んだり、やさしくトンボの応援歌を歌ってみたいと思う。また打楽器、シロホン、ピアニカで合奏もしてみたい。

(以後、○=筆者 ●=園児とする)

○今日は、皆さんと一緒にトンボになって飛びましょう。そしてトンボの歌を歌ったりして楽しく遊びたいと思います。みんなトンボを見たことがあるかな? ●あるー

○トンボには大きな目玉があります。そして羽もあって、どこへでも飛んで行くことができるので、いろいろな物を見ることができて良いですね。空へ飛んでいけたら気持ちいいだろうな。川や池の上を飛んだらお魚の泳いでいるのが見えるかな? きれいなお花やおいしい果物の所になんて停まることができているね。●青い空は水色めがねやね。夕焼け見たら赤色や、ピカピカのもあるでー。

○みんなトンボになって好きなところへ飛んで行きたくない? ●行きたい

○じゃあ、今から行こうよ。●行くー

子どもたちは既に「とんぼのめがね」の歌を知っているらしい。トンボについても詳しい。我々が聞くまでもなく、赤トンボ・シオカラトンボ・鬼ヤンマ・銀ヤンマ・糸トンボ等と口々に教えてくれる。幼虫はヤゴで、川の中で成長することまで教えてくれる子もいる。トンボについての説明は必要ないようである。我々の予想以上に子どもたちの知識は広く、人の話しを真剣に聞いているのには感心する。子どもたちと話し合う内に、お互いに慣れてきたようなので、リトミックを始めてみることにした。クーラウ作曲ソナチネ op.55 No.2の3楽章²⁾(図2)をピアノで弾き、自由な表現活動をしてもらうことにした。「七夕まつり会」で「子どもを何かに集中させたいときには、その前に思いきり好きなように動かしておくといい」と教えていただいたことを早速実践してみる。さてこの曲は、アレグロで心地好いテンポの上、スケルツァンドという発想記号が示すように、活発で生き生きしている。第1テーマはスケールがくり返し重なり、レガートで表現することで大変伸びやかな気持ちが出てくる。ト長調からニ長調、ニ短調に転調してト長調に戻る形や、途中でリズムが変わるなど変化に富み、子どもたちの創造性を高めてくれるのではないだろうか。

○今からピアノを弾きますからトンボになったつもりで好きなように飛んで行ってごらん下さい。

多分、子どもたちは初めて聴く曲であると思うが、みんなトンボの羽をイメージして両手を大きく広げピアノのスピードに乗り、広いリズム室を上手に走ってくれる。平松先生やクラスの先生も共に走って下さったので、テンポに乗れたのであろう。

○今度はピアノが突然止まります。その時、トンボもどこかに止まりましょう。そして、またピアノがスタートしたらトンボも飛びますよ。

何度かくり返したが、みんなとても元気良く楽しそうに見える。

○今度は椅子に座って目を閉じてごらん下さい。みんなはトンボになったつもりで私の話しやピアノをよく聞いていて下さいね。今日はとても良いお天気です。空は真っ青で美しいです。トンボは急に、向こうに見える森へ行きたくなりました。運動場からスイーと飛び上がりました。みるみる幼稚園もプールも遊具も小さく遠くなっていきます。小川を越え畑を横切り、緑のカーペットのような広い田んぼの上もどんどん越えて行きます。風を切って飛んでいるのはとても気持ちがいいですね。(ピアノで30小節まで弾く) アラ、何だかお日さまが雲に隠れんぼしたみたい。(31~40小節) どんどん暗くなって

きます。(41~44小節) あ、雨が降ってきたー。(45~46小節) 大変、どこかで雨宿りしようか。(しばらくピアノも語りかけも休止) ア! 虹が出てるよ、見てごらん。(47~60小節) どうやら雨も上がったみたいよ。今の内に幼稚園へ帰ろう。(11~18小節)

この間、目を開けた子ども数人がみんな静かに聞いてくれた。

○森はどうだったかな。雨が降ってきて困ったでしょう。うまく雨宿りできたのかしら? そうそう、虹が出てたのね。

今まで静かだった子どもたちが堰を切ったように競って話し出す。

●雨降ってんでー。羽が濡れてんでー。大きな虹やった。オレンジ色と青と赤の虹やでー。

「音楽表現」では、「幼児自らが表現しようとする意欲や態度を養う」ことがねらいであるが、そのためには興味付け、動機付けによる音楽的な環境整備が必要である。子どもたちは筆者の仕掛けたりトミックに、うまく乗ってくれたのではないだろうか。これによってトンボのイメージを広げ、「とんぼのめがね」の歌唱表現や合奏への意欲に繋げていきたい。子どもたちは「とんぼのめがね」の歌を既に歌えるようであるが、まず平松先生に3番まで模範唱をしてもらう。美しい歌唱を聴くことで子どもたちの興味や意欲を呼び起こすことができればと思う。

全員で数回歌った後、大太鼓・タン布林・カスタネット・カウベルを使つての合奏に入る。まず、歌いながら大太鼓・タン布林を打たせてみる。「誰か打ってくれる?」と聞くと、みんな意欲満々で競って手を挙げる。全員に何れかの楽器を交代で打たせ、楽器を持たない時は手拍子をさせる。しかし楽器や手拍子を始めると、歌が歌えなくなる。筆者には簡単なことのように思えるが、子どもにとっては異なったことを同時に行うことは意外に難しいことらしい。また、みんなでリズム打ちをする時には正しくできているように見えても、少人数になると自信がないのかあやふやになる。筆者が思っている以上に、子どもに理解させることは難しいと改めて思った。

9~10小節の「青いお空を飛んだから」「おてんとさまを見てたから」「夕焼け雲を飛んだから」をいろいろな楽器で表現させることにした。カスタネット・ギロ・ウッドブロック・すず・トライアングルを見せると、子どもたちは鳴らしたくて仕方がない様子なので、しばらく自由に触らせてみる。「さて、青いお空・おてんとさま・夕焼け雲には、どんな音が似合うかな?」と聞くと、子どもたちはあまりイメージもなく口々に好きな楽器を挙げた。收拾がつかなくなったので、ついこちらのイメージを押し付けてしまったが、このようなイメージ作りは子どもの感性を高め、表現する意欲を高めるのに役立つものであり、常に楽器に触れる機会を与えることや、時間をかけることが大切であると考えた。

9月27日 10:30~11:40リズム室にて(年長児 うさぎ組24名あひる組23名)

今日も年長児に、年中児と同じテーマで「とんぼのめがね」を実習する。リトミックの反応や歌唱力が、年齢差でどう違ってくるのか興味深い。そこへ、ピアノカヤシロホンを使った合奏を加え、どの程度のアンサンブルが可能なのかを知りたいと思う。

どちらのクラスも年中児と比べると、元気良さの中にも落ち着きが見られる。さすが年長児である。筆者も実習第2日目ということで園児に話しかけることに慣れ、気持ちに余裕が出てきたからか多弁になっていることに気付く。子どもの心をつかむには、やはり巧みな話術が重要であろう。

○今からトンボになって素敵な物を探しに行くから良く見えるように目玉のレンズを磨きましょう。ゴ

シゴシゴシ（両手で耳の上あたりをこすってみる）羽がちゃんと動くかな？（バタバタ腕を振ってみる）

子どもたちも素直に表現してくれるのが嬉しい。

○みんな遠くへ飛んで行くけど大丈夫かな？ ●大丈夫

中には、「俺、羽なんか無いもん。飛ばれへん」と現実的な子もいる。しかし、リトミックが始まり大方の子が動き出すと、我慢できなくなるのか同じように音楽に乗って走っている姿は、見ていて微笑ましい。

○どこまで飛んで行ったの？ ●向こうの山まで。田んぼまで。アメリカ。

1人がアメリカと言うとディズニーランド・動物園・フラジル・ロンドン・ハワイと、競いあって知っている地名を挙げてくる。

○雨が降った時どうしたの？ ●洞穴に入ってん。木の枝に止まって葉っぱに隠れてん。羽が1本折れてんでー。 ○困ったでしょう。よく帰ってこられたね。 ●トンボのお医者さんに治してもろてん。 ●僕なんか羽4本とも取れてんでー。 ○どうやって帰ってきたの？

●歩けたもん！

年中児に比べ知識が大変豊かであり、空想がどんどん広がり展開していく。またリトミックの中でストップをかけると、こちらから指示しなくてもポーズを取ってくれる。きっと幼稚園でもこのような遊びを常にしているのであろう。確かに年中児よりも知識が広がり、言葉の表現力も的確で発想が豊かに育ってきているのを感じる。

幼児のことをほとんど知らない筆者が「この程度ならできるだろう」との憶測により合奏譜を作成した。(図3) 幼児の合奏は、先生のピアノ伴奏と幼児の打楽器奏という形にならざるを得ないと思われるが、筆者は以前から「幼児にも簡単なメロディやハーモニーで参加させることができないだろうか」と考えてきた。子ども自身が既に知っているメロディであれば、簡易楽器によるメロディ奏やハーモニー奏をすることにより、音の高低やハーモニーの感覚が育てられ、合奏への意欲や創造性がより一層高められると考える。既に「七夕まつり会」では「かえるの合唱」のメロディをハーモニカやピアノで上手に奏していたのであるから、「とんぼのめがね」でも充分可能であろう。独奏では困難なIとV₇の三和音も、低音（ド・シ）、中音（ミ・ファ）、高音（ソ）と、3グループに分けて合わせることで簡単に成立する。メロディも3グループに分け、2小節程度を4～5音で分奏させる。また音階の上行、下行のオブリガートも入れてみたい。しかし、1クラスを3グループに分けると7～8人ずつとなり少々心細い感もするので、うさぎ組はピアノで和音を、あひる組はシロホンでメロディを担当し、後日2クラスを合わせるよう設定した。

うさぎ組（ピアノ）

楽器を持たせると騒がしいのでピアノを椅子の下に置かせ、各グループ毎に何回も階名唱のくり返しをさせる。「ソソソソラララソソソソソ」今日は前奏の4小節ができれば良い。あまり多くを練習すると混乱すると思う。どのグループもすぐに覚える。さすがに模倣の達人である。「ピアノを持って」と言うとも既に慣れているので上手に構える。3グループとも、上手な子・数回手助けすると何と

かできる子・何度指導しても最初の音の場所が覚えられない子等、様々であるが、レベル差は当然のことであり無理押しは絶対にしてはならない。できない子には心の負担を感じさせることなく、何かでこの楽しさに参加させたいものである。例えば「2小節の最初の1音だけでも弾ければ良い」と考える。

3グループが何とかできるようになったと思われたので合わせてみた。それぞれのグループを指してド、ミ、ソと音を出させると「ドミソの和音や」と言う子もいた。きっと音楽教室に通っているのだろう。さて、グループ別にやっている時は我々の歌に合わせてうまく弾けるのであるが、同時に3グループを合わせてみると大混乱になる。みんなで同じ音を出すのは簡単であるが、違う音を同時に合わせることは大変難しいらしい。たった4小節であるが、15分間が瞬く間に経過してしまい、計画通りには進まないものであると思う。子どもたちには無理なことを強制したようであるが、気を取り直し「また遊びに来ていいかな?」と聞くと、元気に「いいよ、ありがとう」と言ってくれ嬉しかった。筆者の方こそ「とてもありがとう」と言いたい。

あひる組（シロホン）

このクラスは活発な子が多い。きっとシロホンを元気に弾いてくれるだろうと期待してしまう。シロホンはおそらく普段使われていないので音の位置がわかるかどうか心配したが、案外すぐに慣れる。予想通りグリッサンドの大合奏でにぎやかである。一本のバチでメロディを弾かせる。赤グループのグリッサンドは少しお預けにして、ド・シの位置をしっかりと覚えさせることにする。シロホン組はメロディだから、ピアノカよりは楽に合わせることができそうであるが、弾かせてみて打法が良くないのは当然であるにしても、あまりにも音が良くないのに愕然としてしまう。筆者が常に使用しているマリンバの音をイメージしていたのが失敗の元である。この楽器からはとても音の美しさを感じるできないだろうし、創造性も意欲も生み出すことができないと思える。短大からマリンバやキーボードを運んで来れば良かったと悔やまれる。

年長児の合奏指導では、たった4小節の前奏部分だけで終わってしまったが、実習していく中で随分多くのことを考えさせられた。特に前奏部分は、歌を歌い出す前に個々がいろいろな場面をイメージする箇所である。詞がないからこそ一層、興味付けや動機付けをして関心を持たせる必要がある。短大生にこの曲の弾きうたいをさせると、まるでブルドーザーの行進かと思えるような凄まじい前奏・伴奏でかつ元気良く歌うので、いつも注意している。筆者はそよ風のように優しく弾いてほしいと思う。前奏のメロディは音が切れやすいのでできるだけレガートに、伴奏は歌の表現を邪魔しないように軽く弾くのが良いと考えている。筆者の独断的な解釈により、そよ風の中をトンボが爽やかに飛んでいるイメージを伝えたく、園児に「そよ風さんが『トンボさん遊ぼうよ』と言ってるよ」と話しかけた。また、怒鳴って歌ったり騒々しい合奏をさせたくないという思いもある。これは表現のための環境整備とも言えそうであるが、こちらのイメージを提示するよりも、子どもたちの個々の発想を掘り起こすことこそ筆者の役割ではなかったかと反省する。

5. 第2回実習 10月25日 9:00~10:00年中児 10:10~11:20年長児

テーマ 「まっかな秋」³⁾ 「とんぼのめがね」の合奏

今回は広いリズム室が園の都合で使えないということで、各クラスへ我々がお邪魔することになった。子どもたちとはすっかり顔なじみになり、どのクラスでも大歓迎してくれて嬉しい。既に運動会や遠足も終わり、幼稚園も落ち着きを取り戻している時期である。稲の刈り取りも始まり、園庭や周囲の木々も少しずつ紅葉が始まってきている。筆者は子どもたちに、この美しく素晴らしい季節感を味わわせたいと思い、導入で薩摩忠作詞・小林秀雄作曲「まっかな秋」を平松先生に歌っていただくことにする。秋の魅力を具体的に伝えようと、からすうりや紅葉したもみじ、南京はぜの枝といった手土産を持って幼稚園を訪れた。

○今の季節を何と言うのか知っていますか？ ●あきー

○秋は暑くもなく寒くもなくとても良い季節ですから、嬉しいことや楽しいことがたくさんあるでしょう？ ●遠足行ってきてんでー。ライオンいたでー。おさるもキリンも。

○美味しい物もいっぱい採れるでしょ。 ●さつまいも、りんご、みかん、栗、柿、お米

○それから木の葉が黄色くなったり赤くなってきますね。園庭の木や周りの野原や山もとても美しいです。今日はそのような美しい秋の歌を歌います。まっ赤なものがいっぱい出てくるよ。何があるか目をつぶって聞いていてね。(3番まで歌う) ○さあ、まっ赤なものって何があったかな？

●つた、とんぼ、夕焼け、もみじ、ほっぺた、りんご、みかん、栗、どんぐり、いちご、みかん、レモン、はっぱ

秋の様子については先生方が細やかな指導をされているらしく、なかなか詳しい。年中児では関係のないものまで飛び出し、口々に勝手なことをしゃべり出すので、時々テーマに向けて軌道修正が必要であるのに対して、年長児からは的を得た答えが返ってくるのが興味深い。この歌は、最初の「まっかだな」という動機がリズムカルで印象的であり、この部分を平松先生の指導で子どもたちに歌わせることにした。

「まっかだな」という言葉には、ただ単に「赤いものだ」という認識だけでなく、紅く染まってゆく風景の美しさに対する感動、作物が豊かに実ることへの嬉しさといった感情も込められているのである。しかも、「赤い」のではなく「まっか」なのである。したがって、「まっかだな」と歌う部分では、文字の通りにただ発音するように歌っては意味を成さない。「まっか」の「まっ」のところを軽く強調するように、口をしっかりと閉じておいてから勢いよく開けて「まっ」と歌うように助言した。この歌い方は、ともすれば「まっ」の部分だけを少し強調するのではなく、「まっかだな」の全てが強調され、怒鳴って歌われてしまうおそれがあるのだが、意外にもそんなことにはならず、うまくいった。それには、「まっ」の部分だけを強調する歌い方を、こちらが実際に例を示したので、子どもがそれを聞いて、そっくり真似することができたためではないかと考えられる。

続いて、前回の「とんぼのめがね」の歌唱についても指導を試みる。

(以下、☆は指導内容 *は園児の反応とその考察)

☆「とんぼの」――「と」「ん」「ぼ」「の」と1語ずつ歌わないように。言葉として発音するときには「と」だけにアクセントがくるので、「とんぼの」と歌いましょう。

*こちらが、良い例と悪い例とを歌って違いを聞かせると、子どもにもそれがわかったのか、良い例の真似をしてうまく歌ってくれた。

☆「青いお空を」――窓から見えている今日の空のように青くて広い大きな空を思い浮かべながら、大きく口を開けて「あ」と歌う。もっと青くて広くて高い空になるように、背伸びするつもりで歌ってみよう。

*最初に歌ったときには、普通に文字通り「あおい」と歌っただけであったが、窓の外の空を見るようにと言うと、子どもにもイメージがより具体的にわかったのか、すこし伸びやかな声で歌えるようになった。

☆「飛んだから」――トンボが向こうの方へ飛んで行ってしまいました。気持ち良さそうにスーッと飛んでいますね。誰のトンボが一番遠くまで飛んで行くのかな？ずっとずっと遠くへ飛んで行くように歌ってみましょう。(身体全体が広がってのびやかに大きく、飛び去るイメージで)

*おそらく、子どもの頭の中ではトンボが飛び去るイメージが描かれているのだろうが、声には反映されなかった。その原因として二つのことが考えられる。一つは、「向こうの方へ飛んで行く」ので、遠くまで声が届くようにと必要以上に気張ってしまい、力んだ結果、伸びやかさのない声になってしまった。二つめは、「飛んだから」の最後の音が高く、しかも3拍分伸ばさなければならないので、どうしても声を張り上げてしまうからである。1～2度、もっと遠くの方へ飛んで行くようにと言葉かけをしてみたが、子どもの声に変化が見られなかったため、それ以上無理に指導することは止めた。この時点で何度もくり返しやり直させても、期待するような効果が得られず、かえって子どものやる気を損ねることになるのではと考えたことから、今回は敢えて無理押しをしなかった。また、前述の「青いお空を」の部分では、想像するだけでなく実際に空を見てイメージを視覚的に捉え得たためか、声に伸びやかさが加わった。具体的なイメージを描くことができれば、声にそのイメージを反映させることが容易になるが、「飛んだから」の部分では、「飛んで行くように」と言葉で指導しても、「飛ぶ」ということは感覚的なものであり、子どもが各々具体的なイメージを描くことができていたのか不明である。五感でイメージをつかむことができるときは良いのだが、そうでない場合にどのような言葉かけをすれば子どもにより具体的なイメージが描かせられるのか、今後の研究課題として指導方法を検討していきたい。

後半は、「とんぼのめがね」の合奏を何とか形にしたいと思う。まず、1ヶ月ぶりに復習してみる。どのクラスも、どの楽器で遊んだかは良く覚えているが、大太鼓やリズム楽器がどのように出てくるか等、すっかり忘れてしまっている。子どもたちに興味を持たせながら、根気良く継続していくためには、教材や指導方法についてかなりの工夫が必要である。

年長児では、どうしても子どもたちにメロディ奏をさせたくて、打楽器の感覚でメロディ奏をさせてみようかと合奏譜を作ってみた。どのグループにもピアノを習っていたり音楽教室に通っている子が1～2人居り、何とか曲の最後まで繋ぐことはできるのであるが、とても楽しい合奏とは言えない。毎日少しずつ練習を積み重ね、長い時間をかけることができるならば、子どもたちの理解も深まり、十分に形にすることができると思える。それによって、達成感や表現する喜びが一段と大きくなると考えられるが、筆者の短時間の実習はあまりにも性急すぎたようだ。無理な押し付けは、子どもたちの興味や関心を削ぐことにもなりかねない。懸命についてきてくれた子どもたちには申し訳ないことをしたと反省す

る。しかし、合奏は相互の音楽的役割の認識や音楽の仕組みを感知させると共に、仲間意識や社会性の育成に役立つ⁴⁾と考えられ、「音楽表現」のための重要な教材である。

不調に終わった合奏の実習であるが、考察してみると筆者が考えてきた合奏は、美しさ・楽しさには注目しているものの、子どもの生活や意欲への配慮が不足していることに思いあたる。

6. こども音楽会

平成15年2月22日に本学の演奏ホールにおいて、幼稚園の音楽会が開かれ、筆者も久しぶりに参加させていただくことになった。(図4 プログラム参照) 音楽会の前日、園長より「オープニングで『大きなうた』を年長児と共演(うたとピアノ)し、最後に『今日の日はさようなら』を会場の保護者と共に歌ってほしい」との依頼を受けた。筆者は楽譜の持ち合わせがなかったので急遽、何とか前奏・伴奏・後奏を考え、平松先生と出かけたが、ぶっつけ本番にまたもや戸惑ってしまう。「大きなうた」(図5)は輪唱になっていて、まず前奏をつけて平松先生に1番を独唱していただき、次は歌の後半8小節を間奏にして、独唱とピアノの後追い奏、3番は子どもたちの歌が加わるという形で演奏する。急なことなので、伴奏の順序を間違わないだろうか、歌詞をきちんと覚えているだろうかと心配する。我々は譜面通りに、またその中から如何に表現するかという作業をピアノや声楽でやってきた。しかし、楽譜と無縁である子どもに教えるには、如何に子どもに音楽を伝えられるかや、子どもの自発的な表現を重視し、それに対応できる応用力が必要であり、今回のような即興的な表現能力が求められるのであろう。合奏の発表では、年少児は拍子をうまく揃えることができないが、年中児ではきっちり合うようになり、年長児ともなると音楽が生き生きしてくる。中には全身で楽しさを表現している子もいて、素晴らしい。歴然と成長の過程がみられる。「大きなうた」の中では筆者が考えていたピアノのメロディ奏が上手に挿入されていて、やはり幼稚園の先生には勝てないと思い知らされた。

合奏については、客席の家族にまで届くようにとの思いが伝わってきたのであるが、歌になるとその思いが余計に強いのか、どうしても声を張り上げすぎる傾向が見られる。特に年少児は必死に叫んでいるかのような印象を受けた。年中児の歌は、音程も少ししっかりしたものになり、怒鳴る子もいるが、自然な声で歌う子どもも約半数見られた。年長児になると、ほとんどの子どもがあまり怒鳴ることなくしっかりした音程で歌っていた。

年少児に対しては音楽指導を行ったことがなく、また年中児には音楽指導を2回行ったものの、年もまだ幼く、しかも晴れ舞台での発表というある種の興奮状態にある中では、「怒鳴らずに歌う」ということができずとも仕方がないことであろう。しかし、年中児の半数と年長児のほとんどが怒鳴らずに歌えたということは、たった2回の音楽指導であったが、子どもにしっかり受けとめられていたのだと考えられる。また、音楽指導の後日、幼稚園の先生から伺った話しによると、その後の保育で歌っている際に「怒鳴らないで優しくきれいに歌わないとダメだよ」という発言が、園児の方から挙がったということであった。

細田淳子は、「指導者の言葉かけと子どもの声は密接な関係にあり、指導方法や言葉のかけ方によって子どもの怒鳴り声を減少させることができる。子どもらしいことと元気なことは、大きな声で歌うことと同じではない。」と述べている。⁵⁾ 2回の音楽指導を通して、幼稚園児にも理論的ではなく、感

覚的に理解させることは可能であることがわかった。

歌にはいろいろなタイプの曲がある。明るくりズミカルで元気の良い曲、メロディの大変美しい叙情的な曲、切ないような少し哀愁を帯びた曲など。その曲の持っている雰囲気や特徴といったものを感じとり、壊すことなく十分に表現できるような歌い方をしなければならない。そのためにはどのような言葉かけをし、どのように指導すれば良いのか。機会があれば今後探っていきたい。

7. おわりに

平松先生には「七夕まつり会」や「こども音楽会」でいろいろ工夫して美声で歌っていただいたり、筆者の実習全般にわたり、共に考え応援していただいた。特に歌唱指導に関しては熱心なご指導をしていただき、園児と共に多くのことを学ばせていただいた。慣れない園児相手の実習を何とか切り抜けることができたのは、平松先生の応援があったからこそと言える。先生には心から感謝申し上げたい。特に「音楽表現」は、歌とピアノが切り離せないものであり、二人三脚の研鑽が望ましく、今後も良きパートナーとして変わらぬご指導をお願いしたい。

幼稚園実習では子どもたちとの貴重な体験や、保育現場での「音楽表現」のあり方について、じっくり考察する機会を持つことができた。これまで短大では、相手が幼児であっても「指導者が優れた音楽性を持っていれば充分である。子どもたちはおそらく、この程度のことならできるであろう。」との勝手な憶測で指導してきたところがある。勿論、優れた音楽性こそ幼児にとっても最良の音楽環境であることは否めないが、実体験をしてみて、「幼児の心をどう育てるか」という大切なことを忘れていたことに気付かせられた。

常に「幼稚園教育要領」に目を通してきたにも拘わらず、幼児に接して初めて実感することが多い。短大生に接するときのようについ子どもたちに無理強いをしてしまうこともあり、あわや「音楽嫌い」にさせかねないこともあった。

短大ではどうしても技術偏重の「音楽表現」の指導をしてしまうが、もっと音楽の楽しさや感動に気付かせるような努力こそ大切にしなければならない。そのためにも、より一層の教材研究を欠かすことができない。合奏においても同じことが言える。特に子どもたちのためには、どの子にも楽しさが共有できるということを大切にしながら、筆者の独自性が出せるようなものを考えたい。また実習の機会を与えていただけるならば、子どもたちと思いきり楽しく遊びたいものである。

最後に筆者の希望を快く引き受けていただき、協力やご指導をいただいた山田敦子付属幼稚園前園長・古垣昌子園長、そして各クラス担任の先生方に心より感謝申し上げ、実習報告とする。

引用文献

- 1) 幼児のうたとあそびの曲 奈良文化女子短期大学
- 2) ソナチネアルバム1 全音楽譜出版社
- 3) にほんの愛唱叙情歌111 音教社
- 4) 杉江正美ほか 「音楽表現」の理論と実際 音楽之友社 1997
- 5) 細田淳子 子どもの歌唱について―どなり声に関する一考察― 音楽教育学第23-2号 1993

参考文献

- 1) 福田宏之 小児における病態生理と対応—音声障害— 日本耳鼻咽喉科学会会報105巻9号
社団法人日本耳鼻咽喉科学会 2002
- 2) 林 洋子 楽器活動のあり方—現場実践による8年目の検証—
全国大学音楽教育学会紀要第11号 全国大学音楽教育学会 2000
- 3) 伏見 強 幼児期における歌唱発声—日本語の歌— 奈良文化女子短期大学紀要第33号
奈良文化女子短期大学 2002

図 1

たなばたまつりかい
奈良文化女子短期大学附属幼稚園

☆はじめのことば
 ☆う た 「たなばたまつり」 全 日
 ☆う た 「かえるの会想」 年 長
 ☆う た 「ちゅうりつよ」 (手組) 年 長
 ☆う た 「カヌタキ」(こぞぎやチャッチャ) 年 中
 ☆う た 「ロケットでいこう」 年 少
 ☆う た 「お日さま」 年 少

まじぎにのって遊ばまじぎ
 ○年 少 「もりのゆつえんち」
 ○小さいお友だち 「おかあさんといっしょ」
 (年長入園のお友だち)
 ○年 中 「あめのこのぼっけん」
 ○年 長 「ロケットののって出発だ!!」

★たのしいおんがく
 ○「目にぬがいを」他 奈良 加代子先生
 藤原 隆子先生

図 2

図 3

トンボのめがね
7:00分・作曲

図 4

子どもおんがくかい
H18 2 22 (土) AM10:30
新 演習ホール

オープニング 大きなうた(年長)

- 1 りんご組(年少) (作曲) チョッキョッキのリズム (32) さんかく おにぞり
- 2 みかん組(年少) (作曲) トコトントン (32) けげのあそび
- 3 みかん りんご組(年少) となんいうがすき
- 4 きく組(年中) (作曲) こねこのブルカ (32) にしののこりに
- 5 たんぽぽ組(年中) (作曲) 手とものせかい (32) いいなんもたち
- 6 きくたんぽぽ組(年中) ひしりの手
- 7 うさぎ組(年長) (作曲) ガボラ (32) ほねほねのたんけんたい
- 8 あひる組(年長) (作曲) おもちゃの兵隊 (32) てのひらと大団に
- 9 あひる うさぎ組(年長) (32 年組) きみとぼくのラララ

図 5

大きな歌 中島光一詞・曲